

令和元年6月26日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04847

研究課題名（和文）学びのユニバーサルデザインの実践の推進

研究課題名（英文）Promotion of practice of universal design for learning

研究代表者

高橋 あつ子（Takahashi, Atsuko）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：40508230

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、UDL実践の推進のために、研修、授業研究の在り方を探り、もたらされる変容を検討することを目的とする。小中学校4校において研修、授業研究を重ね、教師と生徒に質問紙調査を行った。

研修にはガイドラインの理解、学びの障壁の体験、授業作りが有用であった。授業研究は、次第に多様なオプションの提供が進み、学びの質を高めるためのゴール設定やルーブリック活用に発展していった。調査では78%の教師がUDLを有効ととらえ、97%が日常的に意識した実践をし、主体性、認知、メタ認知が進み、他の場面への転移、指導力向上をあげていた。生徒の質問紙として「学びのエキスパート尺度試行版」を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学級には能力差があるだけでなく、子どもの学び方も多様であり、一斉指導には限界がある。「学びのユニバーサルデザイン（UDL）」は、個々の子どもが自分に合った学び方を選び、主体的に課題達成していく枠組みである。本研究では、研修でガイドラインを学び、授業研究を重ねることで、一斉指導になれた40人集団の日本でも実践できることが示された。授業実践を通して教師たちのオプションの提供の仕方も熟達し、ルーブリック評価も進んだ。UDL実践によって、何より子どもの主体性が高まり、認知、メタ認知が進み、教師の指導力も高まったことが確かめられた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to develop effective professional development and lesson study to promote UDL practice in schools. Professional development and lesson study sessions were conducted at four different schools, followed by the surveys with the teachers and students. The professional development programs including understanding of the UDL Guidelines, learning barriers simulation, and assistance for designing lessons were found most effective. In the lesson study sessions, options were offered more frequently, and goal-setting and rubrics are increasingly more valued. According to the survey results, 78% of the teachers found UDL effective, and 97% engaged in their practice with UDL in mind. They reported that the students' self-direction, achievement and meta-cognitions were enhanced, and that the effects were transferrable to other settings. Improvement in the instructional skills was also reported. "Expert Learner Scale (pilot version)" was created to measure students' growth.

研究分野：教育心理学

キーワード：学びのユニバーサルデザイン 多様なオプション 学習方略 自己調整 実行機能 校内研修 校内研究 学びのエキスパート

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ユニバーサルデザイン(ロナルド・メイス, 1985)の理念は、教育にも活用されるようになったが、当初は環境整備に偏りがちで、その後、授業デザインにも生かされ始めた。しかし、一斉指導型が根強い日本においては、平均層対象の効率性をねらった教師の指導方略に終始しがちで、教育モデルに依拠したものであった。一方、「学びのユニバーサルデザイン(UDL)」(CAST)は、多様な学習者が何のために何をどのように学ぶかを選択できる自己主導型の学習を目指した学習モデルである。

折しも、「主体的・対話的で深い学び」が推奨され、多くの学校において、授業改善の取り組みが始まった。そこでも教師が生徒に対話やグループ活動を促すことによって、従来型の指導から脱却する模索が始まった。この機会に、新しい学力観に根ざした教育実践を追究し、教育モデルから学習モデルへの転換を果たすのに、学びのユニバーサルデザインへの注目は価値があると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究では、集団のサイズの異なる日本におけるUDL実践の可能性を探り、それを推進する方法を見いだすことを目的とする。そのために、まずUDL実践を育む研修のあり方を探り、学校全体で実践を広げる校内研究の在り方を探る。さらに、UDL実践によって、学習者、教師に何がもたらされるのかその変容を探ることを目的とする。あわせて、効果検証の方法も検討することとする。

### 3. 研究の方法

本研究は3段階で進めた。まず第1段階では、教員研修のあり方を探るために、教員研修内容の検討と、実施、その後、アンケートや観察から再構成を行い、その繰り返しから、研修モデルを抽出した。

第2段階では、UDLに学校全体で取り組む研究協力校4校で、授業研究を重ね、授業実践の変化を検討した。

第3段階では、UDLの効果を児童生徒や教師への調査で検討した。

### 4. 研究成果

#### (1) 研修プログラム

研修内容としては、UDLのガイドラインの理解、多様性や障壁を体験し方略選択できる学習体験、授業づくりに大別される。においても概念学習より、実際の授業展開を例示し、その中で3原則や9つのガイドライン、チェックポイントを研修する方が効果的であった。また、海外の実践例より日本のものの方が、実現可能性を実感できるよさがあった。においては、障害の社会モデルを前提にし、多様な学びの障壁を想像できるような構成とし、その当事者の立場に立って、授業における要望を出し合う体験が、授業者となったときに活用されることがわかった。においては、模擬授業を複数回、体験しても、自分の授業をUDLでデザインする段階になると、尻込みする教師も多く見られた。新たな授業デザインへ転換する不安を取り除きながら、WHY, WHAT, HOWを明確にしていくワークショップの意味合いは大きいと言える。さらに学習する基盤づくりとして、協同学習の技法や学校グループワークトレーニング(GWT)、生徒指導や学級経営に関わるPBISやSELを研修し、UDLに関連づける学校、UDLで多様な表現を求めても一定の規準で評価できるように評価についての研修を位置づけた学校もあった。それぞれに研修後の授業実践に発展させていくことができた有用であった。

#### (2) 授業研究

研究協力校4校の授業研究経過で共通する局面を抽出すると以下の6段階に分けられた。初期に見られる抵抗、複数のオプションの提供を試みる段階、活動が拡散し戸惑う段階、違いを超えた学びの良さを共有できる段階、教師主導が減っていく段階、他の教師の実践から新たな実践が生まれていく段階。

授業研究の冒頭に、教科研究の立場から指導技術の優劣に関わる指摘ではなく、子どもが学ぶ姿をとらえて協議するよう促した。それでも教育モデルから学習モデルの意識の転換には、時間と努力が必要だった学校もあった。

授業実践の試みは、ガイドラインや実践例から「複数のオプション」が可視化されやすいので、そこへの挑戦が始まる実践が多かった。それも初めは同じ具体的操作で素材が違うだけのものから、具体 半具体 抽象などの違いを意識したもの、理解の程度に応じた足場かけ、学び方の違いに着目して、視覚や聴覚や触覚(知覚のオプション)へと移行していった。

オプションの提供によって活動が拡散し、收拾をつけにくくなる課題にも直面した。そのような局面で、“WHY”が重要だと気づき、学びのエキスパート指標や単元ゴール

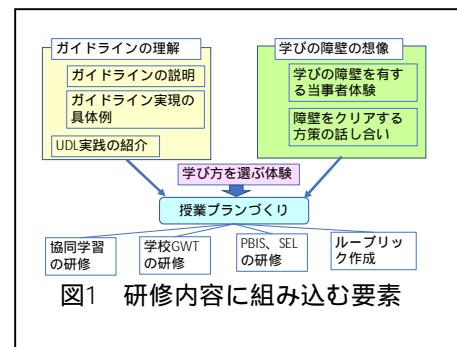


図1 研修内容に組み込む要素

を示す実践に移っていった。  
 言語化に偏りがちな学習活動や表現活動や文字情報を転記するに留まる調べ学習から質の高い思考を促すためには、方略の違いを超えて何のためにどう学ぶを希求するかのゴール設定が鍵になる。集中し活動すればいいのではなく、何を指してどういう力をつけているかを見ようとする授業言及に高まっていった。  
 学習者中心に授業設計されるようになっていたが、それでも教師が全員に指示を出し、確認し注意を促す場面があったが、それが必要なか見直す動きが出てきた。学習者が個として目標に向かって学習をスタートさせれば、学習中は必要に応じて足場かけを求め、友人や教師も含めた環境に働きかけるため、一斉指導の必要性が減じていった。  
 学習者主導の授業から学んだ他教科の教師が、自分も学習者主導で授業設計できるようになっていった。

(3) 効果検討

教師への調査 中学校 2 校 36 名の教師から回答を得た。

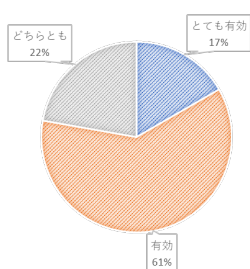


図2 UDLの有効性

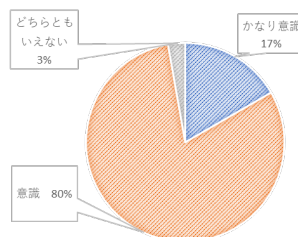


図3 UDL意識の程度

教師の多くが、有効だと捉え、日常の授業実践にも意識して臨んでいる様子が見え、また取り組んでよかったと思えることの自由記述には、29 の記述が得られ、「主体的になる」「認知が進む」「メタ認知が進む」「他の場面に転移する」「指導力上がる」に絞られ、学習者の変化と、教師の変化が読み取れた。

広げていく際の課題として、「研修や準備にかかる時間」「UDL の理解や評価など本質に迫る難しさ」などが抽出された。

生徒への調査

効果測定に用いるため「学びのエキスパート尺度」作成を試みた。質問項目の検討から、授業者が目指すべき学習者の姿をイメージするのに有効であったが、尺度については検討中である。

なお、本研究において、学習者が活用できるように「学びのエキスパート・ブックマーク」を作成し、3年間の研究成果をまとめた報告書(全 86p)を作成し研究協力校などに配本した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

高橋あつ子、場の発想から、ニーズ対応と成長支援を保障する提案へ、月刊学校教育相談、査読無、2月号、ほんの森出版、2019、24-27

伊藤亜矢子編、学校でする子どものアセスメント、高橋あつ子、不得意を見つけ得意を伸ばす、子どもの心と学校臨床、査読無、第18号、遠見書房、2018、11-18

高橋あつ子、愛着や発達に課題のある子を包み込む学級経営、指導と評価、査読無、768号、図書文化社、2018、15-17

高橋あつ子、インクルーシブ教育を推進する学校経営、小学校時報、査読無、No.765、2017、4-8

一ノ瀬秀司・高橋あつ子、私学における特別支援教育の体制整備、日本学校心理士会年報、査読有、第10号、2017、75-85

高橋あつ子、特別支援教育の目標と課題、いじめの解明 -14、査読無、第一法規、2016、3-15

〔学会発表〕(計 3 件)

高橋あつ子他、学校全体で取り組む「学びのユニバーサルデザイン(UDL)」-校内研究の推進と課題-、日本LD学会新潟大会、2018

一ノ瀬秀司・高橋あつ子、私立進学校における合理的配慮 実践事例にみる可能性と課題、日本LD学会新潟大会、2018

高橋あつ子他、私立高等学校における特別支援教育-私立進学校における学業達成へ向けての支援の3段階-、日本LD学会宇都宮大会、2017

〔図書〕(計 4 件)

三村隆男編 学校マネジメントの視点から見た学校教育研究、高橋あつ子、特別支援教育、学文社、2019、269

高橋あつ子編著、私学流 特別支援教育、学事出版、2018、160

大野精一・藤原忠夫編、学校教育相談の理論と実践、高橋あつ子、発達障害のある児童生徒への支援、あいり出版、2018、222

栗原慎二編、マルチレベルアプローチ、高橋あつ子、特別支援教育、ほんの森出版、2017、62-67、159

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：バーンズ 亀山 静子

ローマ字氏名： SHIZUKO KAMEYAMA BARNES

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。